大正11年2月25日第3種郵便物認可
2012年11月25日発行(増刊)11月15日発売
通巻5165号

週刊朝日
増刊号
定価650円
2012/11/25

新「名医」の最新治療2013

50の最新治療

がん、脳の病気、心臓・血管系の病気、
整形外科、感染症・アレルギー・
呼吸器系の病気、
目・耳の病気、歯科など

全国160人の名医が登場!

巻頭2大特集

ロボット手術はどこまで進化したのか

私たちの知らなかった放射線治療

中高年の病気を救う治療と医師がここにいる!

抗菌加工 本誌の表紙は、抗菌加工を施してあります。

本誌は収益の一部を「日本対がん協会」に寄付します。

医師 **泉 雅文**

いずみ・まさふみ●1998年、東京大学医学部卒業。同大学医学部附属病院脳神経外科、NTT東日本関東病院勤務。2008年より同院でPLDDに携わる

Top どこまでも「患者思考」 日本の名医 Interview

脊椎・脊髄の深い知識によるPLDDで首や腰の慢性的な痛みの改善を目指す

北青山Dクリニック

診療科目: 外科、血管外科、脳神経外科、消化器外科、形成外科、内科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、皮膚科、婦人科
受付時間: 月～金 9:00～19:00　土 9:00～18:00　休 診 日: 日・祝
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-7-10 AKERAビル B1F
TEL.03-5411-3555　FAX.03-5411-5666　http://www.dsurgery.com/
● 問い合わせ・相談用E-mail　info@dsurgery.com

銀座線外苑前駅より徒歩でアクセスできる立地

保存的治療と手術の中間に位置するPLDD

腰痛の主な原因として知られている椎間板ヘルニアは、リハビリや投薬などの保存的治療から手術まで、幅広い治療が行われる。しかし、中には保存的治療では十分な効果が得られず、かといって手術に踏み切る程に症状が重いわけでもないという症例もある。この場合、患者によっては長期にわたり、痛みを抱えたまま過ごすことも少なくない。

「保存的治療と手術の中間に位置する治療として、こうした患者さんに有効なのがレーザーを使ったPLDDです」。そう語るのは北青山Dクリニックの泉雅文医師。PLDDは、椎間板に挿入した針を通じて内部にある髄核にレーザーを照射し、蒸散させて空洞を作る手技であり、内部の圧力を減らして閉じようとする力を働かせることで、飛び出ているヘルニアを元に戻して症状を改善させる。切開せず、針を通すだけで施術できるために体の負担も少なく、日帰りも可能だ。

1階と地下1階それぞれの受付には、椎間板ヘルニアや下肢静脈瘤など、さまざまな症状に悩む患者が訪れる

スタッフが連携して最先端で質の高い医療を提供している

脳神経外科の知識をPLDDに応用

泉医師は、本来脳神経外科治療に携わってきた医師であり、整形外科の治療とされるPLDDは、分野が異なる治療とも取れる。しかし、その見方に対し、泉医師は次のように説明する。「脳神経外科は脳に加え、脊椎・脊髄も治療の対象とする診療科であり、PLDDのような脊椎・脊髄に針を通す手技も頻繁に行っています」。実際に、脳神経外科の経験は、病態の正確な把握や的確な治療に役立っており、2011年にはその治療が知られて訪れる患者も急増した。「腰痛の原因1つをとっても、椎間板ヘルニアだけでなく、一般的な腰痛症から変形性脊椎症などの多様な疾患があります。逆に、足の痛みや痺れが実は椎間板ヘルニアによって起こっていることもあるのです」と泉医師が語るように症状も多様であり、さらには長年にわたって痛みを抱えてきた患者や、他院ではPLDDが適応不可とされた患者も多かったという。

治療後は、回復室やリカバリールームで休んだ後に帰宅できる

そうした訴えに対し、同院では、PLDDで症状の軽減を促していった。その際には、ヘルニアの位置に応じた椎間板の一部だけの圧力、いわゆる局所圧を減らすことを心がけているという。PLDDを行う医療機関では、ヘルニアを生じている椎間板全体の圧力を減らすことが一般的だが、泉医師は今のやり方に手ごたえを感じている。「椎間板全体より、局所圧を減らす方が効果的な治療が期待できます。PLDDはそもそも効果を体感するのに時間がかかることがありますが、局所圧を減らす場合、その時間の短縮や、更には術後の改善の度合いも違っていました」。だが、椎間板の一部だけにレーザーを照射しようとすれば、針の埋入の際に細かな調整が必要となる。それ故に、高い技術があるからこそできる手技といえるだろう。

PLDDは点線内のようなヘルニアなどを対象に行い、痛みを改善させる

患者に最も適した治療を追求

こうした高度なPLDDを行う一方で、同院では治療の目標をあくまで症状のコントロールに置いており、保存的治療も含めた最適な治療を選ぶことを重視している。「基本は症状に適した治療を選択することです。例えば、突発的な症状が表れた患者の場合、3カ月もすれば症状が収まる可能性も高いため、保存的治療で様子を見ることが多くなります」

その一環として、IVDDと呼ばれる椎間板ヘルニアの最新治療も導入した。この治療はPLDDと同じ原理だが、レーザーの代わりにドリルのようなワイヤーで髄核を削っていくため、組織の硬い症例でも治療できる利点を持つ。現在、PLDDと同じ様に局所の減圧が可能かを検討しながら、症例に合わせて、より効果が高くなる治療を選択しているという。

治療前には診断結果を基に方針を丁寧に話し合う

泉医師が見据えているのは、PLDDやIVDDの先のヘルニア治療だ。「症例数の増えたこの1年半で、適応できる症例の見極めや、治療効果など、PLDDの可能性を追求できました。その知識を整理しながら、内視鏡の日帰り手術のような、より幅広い症例での日帰り治療に取り組んでいきたいですね」。PLDD自体も優れた治療といえるが、泉医師はそれにこだわることなく、患者のために最善の治療を追及し続けていく。

取材／鈴木健太

PLDDはわずかな時間で行われる

※PLDDとIVDDは保険適用外です。治療費は発症部位や治療個数によって異なりますが、PLDDが40万～70万円、IVDDが50万～80万円